

微生物から生まれた映画の力

市川 誠

2018年でペニシリンが発見されて90年になるらしい。この90年間で、多くの微生物由来の薬が発見され、人間の社会に多大な影響を与えてきた。日本映画に与えた影響もある。

『モスラ(1961)』の劇中に「インファント島の洞窟に生えるカビで作ったジュース」という物が登場する。無人島だと思われていたインファント島近くで水爆実験が行われるのだが、このジュース、人体への放射線障害を中和してくれる作用があるらしく、流れ着いた日本人と島民の命を救っている。ペニシリンから得た着想である事は言うまでも無い。

『マタンゴ(1963)』という作品は、無人島で、キノコが人の体を乗っ取ってしまう恐怖映画」として認知されているが、よくよく観ると劇中で誰もマタンゴに殺されていない。無人島で飢え死にしていないし、銃で撃たれても死なない体になっており、個人的にはマタンゴに対して恐怖どころか、好感を持った(笑)

『風の谷のナウシカ(1984)』は『モスラ』と『マタンゴ』を合わせた世界観。人体というスケールではなく、世界全体を菌類が守ってくれており、自然に対する畏怖を忘れ、軍事力を誇示する人間が、巨大な蟲にコテンパンにされる物語だ。

キノコ図鑑や生物の教科書よりも、『モス

ラ』や『ナウシカ』に影響を受けて、菌類の世界に興味を持った人は少なくないだろう。

『ウルトラセブン』や『宇宙戦艦ヤマト』に憧れて宇宙飛行士に

なった人がいる様に、映画で描かれる微生物の魅力が、人類に貢献する科学者を生むきっかけになる可能性は充分にある。



『シン・ゴジラ(2016)』において、ゴジラの生態を研究する科学者達は、「ゴジラは、人類の存在を脅かす脅威であり、人類に無限の物理的な可能性を示唆する福音でもある」という考えに達する。(※劇中「ゴジラを凍結するために、ゴジラ体内の極限環境微生物の活動を封じる」という描写があるが、これは「共生細菌を封じる事で、害虫を駆除する」という実在する方法がアイデアのベースになっている。)

科学の発展が、環境破壊や戦争、薬害や原発事故など、多くの問題を生み出して来た歴史があるが、微生物にはゴジラ以上の可能性があるのも事実だ。微生物から生まれた映画と映画を観て育った若い世代が人類の未来を明るくしてくれる事を期待したい。